

Title	第42回岐阜外科集談会演題抄録
Author(s)	
Citation	日本外科宝函 (1966), 35(6): 1076-1078
Issue Date	1966-11-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/207338">http://hdl.handle.net/2433/207338</a>
Right	
Type	Others
Textversion	publisher

## 第42回 岐阜外科集談会演題抄録

日時：41年8月24日（水）午後6時より

場所：岐阜医大丹羽講堂

### 1) 動脈管開存症の1手術例

岐阜第一外科

渡辺 裕・安藤 充晴

岐阜第一内科

時光 直樹

症例、11才男子

何ら自覚症状を訴えないが、健康診断にて本症を発見された。

入院時全身所見はほぼ正常、心電図は軽度の左室肥大、肺動脈弁部心音図は収縮期、拡張期に亘る連続性雑音を示す。レ線的に、心血管撮影、心カテーテル検査で診断確定。

低体温麻酔にて切離、結紮を行なった。

動脈管は全長約12mm、直径は両端部では9mm、中央は6mmで鈍角をなし下行大動脈より分岐していた。術後の心音図に第Ⅱ音の軽度の分裂を認めた。

第2病日に嘔声を発見し、咽喉科検査では左声帯は術後50日目にKadaverstellungに固定され萎縮していた。

術後の心音図と嘔声につき若干の考案を加えた。

### 2) 動脈絞窄症の1手術治験例

岐阜第一外科

渡辺 裕・渡辺 祥

岐阜放射線科

杉山 公二

17才男子、昭和38年4月高校入学時高血圧を指摘され、医治を受けたが改善されず、昭和39年7月、心血管造影にて大動脈絞窄症と診断され来院、運動時心悸亢進、起立時めまいを訴える。現症：体格大、栄養常、胸廓左右対称、心濁音界正常、収縮期雑音聴取、両側膝窩、足背動脈の脈搏をふれない。臥仰位の血圧、右腕146/94、左腕168/96、大腿動脈（直接法）72。昭和39年11月、低体温麻酔下に、左第5肋間にて開胸、筋切開時副血行路發育良好、大動脈の左鎖骨下動脈分岐部から約3cmの部が狭窄し、肺動脈管は靱帯となり閉鎖。大動脈を遮断し狭窄部を中心に約1cm切除の上端々吻合施行、内腔の最狭部は直径2mm、定型的

な成人型大動脈絞窄症があつた。組織学的に内膜の肥厚を認めた。術後2年にて血圧は大凡正常値となつた。

### 3) 大血管転位症の1手術例

岐阜第一外科

渡辺 裕・渡辺 祥

岐阜市民病院

飯沼 順二

14才女子、主訴：チアノーゼ。家族歴：特記すべきことなし。現病歴：生下時より顔面チアノーゼがあり、10分程歩行すると呼吸困難を来す。入院時所見：身長147cm、体重41kg、体格中等度、栄養良好、顔面、鼻、口唇に高度のチアノーゼ、ゆびに著明な鼓指を認める。血圧92/70、胸部左右均斉、心濁音界やや拡大、収縮期雑音聴取、静注法心血管造影にて、大動脈は肺動脈と同時に造影され、側面像で大動脈は肺動脈より前方に認められる。心カテーテルにて大血管転位、ASD、PDAを確認し、VSDも予想される。昭和41年2月16日低体温麻酔下に右第4肋間より開胸、大血管転位症を確認、Blalock-Hanlon手術Cooley変法にて肺静脈-右房吻合術施行、術後チアノーゼやや軽快、歩行能力も好転し階段昇降も可能となつた。

### 4) 巨大後腹膜腫瘍の1例

大垣市民病院外科

森 直之・蜂須賀喜多男

森 直和・加藤 量平

○石川 覚也・村瀬 充也

田本 杲司

症例は54才の男性で、右下腹部腫瘍を主訴として来院した。腫瘍は成人頭大で、弾性硬、移動性がなかつた。肝機能検査、その他に異常なく、レ線写真で胃、十二指腸、上行結腸、右腎、腹部大動脈の圧迫が認められ、後腹膜気膜で右後腹膜腔に空気が入らなかつた。上記の所見により、後腹膜腫瘍と診断して手術を施行、経腹腔的に腫瘍を全剔した。その際、腫瘍は右腎と強く癒着していた。剔出標本は36×29×20cm、重

量約9kgで、剖面は主として淡黄色脂肪様で、組織学的にも脂肪細胞と間質結合組織が大部分を占めていた。

以上の所見により本腫瘍は腎周囲脂肪被膜より発生した脂肪性腫瘍と思われるが、なお病理組織学的に検索中である。

## 5) 馬蹄鉄腎の1手術例

木曽川病院外科

渡辺 克・桧垣 潜

右腎結石をともなつた27才男の馬蹄鉄腎の症例に対して、橋部離断術、右腎截石術、右腎固定術を行ない、10日後反対側の腎固定術を行なつて良い結果を得た。異常血管などのため腎固定術は困難な場合があるが、正常位置に近くなるのでできれば腎固定術も行なつた方が良いと考える。また、術後の腎機能低下を考へて、両側の腎固定術は同時に行なうより2回に分けて行なう方が安全であると思う。反対側の腎固定術は、腹部大動脈と橋部断端の癒着などを考えると、1回目の手術より10日から14日後に行なうのが適当と考へる。

## 6) 肝内胆石を伴つた先天性胆道拡張症の1例

関ヶ原病院外科

国枝 篤郎・○山田慎一郎

症例、22才女性、主訴：右季肋部痛。既往歴：9才頃黄疸、右季肋部痛にて入院治療を行なう。18才頃より右季肋部痛をきたし、41年6月29日胆石症の診断のもとに、開腹術を施行する。先天性胆道拡張症に肝内胆石を合併していた。手術は胆嚢摘出術、胆管囊腫空腸吻合（Roux-Y）を施行、術後経過良好である。

先天性胆道拡張症は比較的稀な疾患であるが、日本人、しかも女性に多く、若年者に好発する。

我々の症例の如く先天性胆道拡張症に胆石を合併した例はまことに珍らしく、我々の調べた範囲では本邦報告例がみられなかつた。よつて1例報告し若干の文献的考察を加えてみた。

## 7) 骨盤に発生せる Ewing 腫瘍の1剖検例

岐阜整形外科

松永 隆彦・佐々木 晃

昭和40年4月20日サッカーでボールをけつて以来、

右股関節痛を訴え、4月25日以来、某病院にて骨盤カリエスとして抗結核療法を受けたが効果なく1ヵ月半後当科に受診、病理組織標本により始めて Ewing 肉腫と診断し、レントゲン治療を行なつたが、9月22日死亡した15才男子の1剖検例を報告した。

## 8) 先天性幽門狭窄症の2治療例

岐阜市民病院外科

島田 脩・河村 義博

安江 幸洋

生後2ヵ月の男子、生後3ヵ月の男子の先天性幽門狭窄症の2患者に何れも Rammstedt の手術を施行して良好な経過を得たので若干の文献的考察を加えて発表した。

## 9) 頭部腫瘍経験例

岐阜第二外科

桧木 良友・二村 敦朗

過去10年間に我々の教室で経験した頭部軟部及び頭蓋骨腫瘍は11例ありまして、そのうちわけは、良性腫瘍としては、lipoma……1, neurofibroma……2, lymphoangioma……1, plasmacytoma……1, 悪性腫瘍としては、melanosarcoma……1, psickle-cell carcinoma……1, lymphosarcoma……1, osteosarcoma……1, hepatomaの転移……1, その他に Hand-Schüller-Christians disease……1 です。

頭部レントゲン単純写真で11例中8例に何らかの変化をみとめ、良性悪性腫瘍をとわず頭蓋骨補填術が必要となる事が多く、我々の教室では、自家新鮮肋骨及びPileAを使用して良結果を得た。

## 10) 急性脾臓炎に対する Trasylol の使用経験

岐阜第二外科

鈴木 晴雄・有馬 敬

広瀬 旭

最近、急性脾臓炎の治療に、理想的な方法として期待されておる酵素阻害剤、Trasylol の使用経験2例を得ました。56才の男子には発病18時間後に、52才の女子には発病52時間後に、Trasylol 1日50,000～25,000を6日間投与したところ、投与後数日にして尿中、及び血中アマラーゼは正常値にさがり症状や全身状態も著しく改善された。これは本剤の酵素不活性化の威力を

示すものと思われる。しかし、Urea-N, 高血糖, 高血圧, GOT の上昇が長い間見られることから、下毒, 肝, 腎の庇護を行なうことが不可欠だと思う。尚、本剤の副作用については、アレルギー反応, throwbophl-cbitis 等を上げる人もあるが、我々の症例では好酸球の増加、一過性の白血球数の減少を見たことからしても今後尚充分な研究が必要と思います。

#### 11) 悪性甲状腺腫と誤った良性出血性甲状腺腫の1治験例

岐大第2外科

佐 治 董 豊

我々は最近悪性甲状腺腫の疑りのもとで手術を施行、術中 biopsy にて悪性像を認めなかつた良性出血性甲状腺腫の1例を経験し、全治しえたので若干の文献的考察を加えて報告した。

患者は39才の女姓で揖斐町に現住、発病来3ヵ月間の経過を示し、触診では弾性硬で表面平滑ならず、移動性あまりなし、と云う事で悪性像を臨床上示しており、甲状腺機能亢進症状は認めずと云う事で手術施行、多胞性の血腫を認め、周囲との強いゆ着があり、biopsy にて良性であると云う事が判明した。